

バイブルスタディ Pastor JD Farag

2018. 11. 11

ピリピ人への手紙 1:20-30 「なぜ私たちは、恐れるものなどないのか」

今日の聖書箇所は**ピリピ 1 章 20 節 - 30 節**です。

使徒パウロは聖霊によって、ピリピの教会にこう書いています。

- 20 私の願いは、どんな場合にも恥じることなく、今もいつものように大胆に語り、生きるにしても死ぬにしても、私の身によってキリストがあがめられることです。
- 21 私にとって生きることはキリスト、死ぬことは益です。
- 22 しかし、肉体において生きることが続くなら、私の働きが実を結ぶことになるので、どちらを選んだらよいか、私には分かりません。
- 23 私は、その二つのことの間で板ばさみとなっています。  
私の願いは、世を去ってキリストとともにいることです。そのほうが、はるかに望ましいのです。
- 24 しかし、この肉体にとどまることが、あなたがたのためにはもっと必要です。
- 25 このことを確信しているので、あなたがたの信仰の前進と喜びのために、私が生きながらえて、あなたがたすべてとともにいるようになることを知っています。
- 26 そうなれば、私は再びあなたがたのもとに行けるので、私に関するあなたがたの誇りは、キリスト・イエスにあって増し加わるでしょう。
- 27 ただキリストの福音にふさわしく生活しなさい。  
そうすれば、私が行ってあなたがたに会うにしても、離れているにしても、あなたがたについて、こう聞くことができるでしょう。  
あなたがたは霊を一つにして堅く立ち、福音の信仰のために心を一つにしてともに戦っていて、
- 28 どんなことがあっても、反対者たちに脅かされることはない、と。  
そのことは、彼らにとっては滅びのしるし、あなたがたにとっては救いのしるしです。  
それは神によることです。
- 29 あなたがたがキリストのために受けた恵みは、キリストを信じるだけでなく、キリストのために苦しむことでもあるのです。
- 30 かつて私について見て、今また私について聞いているのと同じ苦闘を、あなたがたは経験しているのです。

一緒に祈りましょう。

私たちが理解できるよう、神に祝福をお願いしましょう。

愛する天のお父様、私たちは聖霊の導きにより、大変力強い聖句を読みました。

約 2000 年後の今、このような時代にあって、私たちは聖霊によって導かれています。

主よ、どうか聖霊を通して、私たちのいのちに語りかけて下さい。

私たちはただここにいるだけでなく、聖霊がこのあなたの教会に語ることに心を留めます。

イエスの御名によって祈ります。アーメン。

今日は“恐れ”について話したいと思います。

『なぜ、クリスチャンとしての私たちには、本当に恐れるものが何もないのか』

今日の聖句で、使徒パウロは「私には恐れるものが何もない」と、大変驚くべき主張をいくつかしています。

死を恐れず、未来を恐れず、困難さえも恐れず、どんな痛みや苦しみを伴う苦労をも恐れぬ。

私にとっては、これらはビッグ 3 と言えます。

私たちは正直になって、これらの特異な領域において、しばしば恐れを感じるのを認めなければなりません。

そこで、一緒にピリピ書を学び、パウロのこの主張を調べていきましょう。

そうすることで、“なぜ”、またはもっと重要かもしれない“どうやって”、恐れなく喜びをもって生きることができかを学びます。

これまでも率直に、正直に自分自身の恐れに関して話してきましたが、私は容易に恐れを抱く傾向があります。私にはピリピ 1 章は絶大な励ましとなってきたので、皆さんにも、これが励みになることを願っています。

最初に、“死への恐れ”について話しましょう。

20 節と 21 節が興味深く、パウロははっきりと「死を恐れていない」と書いています。

事実彼は、本当に死を歓迎していたようです。むしろ、死にたいと言っているのです。

なんと病的なんでしょう。

「私にとって死ぬことは益です。しかし、あなた方は私を必要としており、私にとっては生きることはキリスト。

私は、その二つのことの間で板ばさみとなっています。」

「私の心は主と一緒にいる事を切に望んでいます。でも私にとっては生きることはキリスト。」

これは、“win - win situation”（双方に利益、メリットがある状況）の典型です。

生きることは、キリストのために勝利すること。

死ぬことは、キリストと共にいることができる益。

win - win。これが、ここでパウロが言っていることです。

これはまた別のことですが、この世はハイジャックされていると言えます。

アラブ人がハイジャックという言葉で表現するべきじゃないことは分かっていますが、世は本当に、私たちからこの事をハイジャックしてしまいました。

質問は、「どうして彼はそんな主張ができるのか。」「どうしてそのように言えるのか。」

「彼が言っていることは本当？」はい、本当です。

「パウロは本当に死を恐れることがなかったの？ 歓迎していた？」はい、間違いなく。

どうやったら、それが可能なのか。

それは、パウロがキリストのために生き、キリストに献げていたからです。

イエス・キリストは彼の“生”の情熱の支配者でした。

ある人が、この部分を自分の人生に当てはめると分かり易いと言っています。

これをもっと簡単に言えば、私にとって生きることは（ ）

（ ）の部分は、もちろん、キリストです。「本当に？」

どうか、私の心を聞いて、私の心の内を知って下さい。

このことに関して、主が私の心を調べておられます。

「神の御前で、正直に、本当に、カッコの部分にイエス・キリストが入るのか。」

「イエス・キリストは、私の“生”の情熱の支配者なのか。」

なぜなら、イエス・キリストがそうであるなら、私は死を恐れないでしょうから。

イエス・キリストは死に打ち勝ったのだから。

御言葉の中で、最も驚愕の発言と言いますか、他に適切な言葉が見つかりませんが、その一つ。

ちょっとどころではなく、パウロは死をあざ笑っています。

### I コリント 15:54-55

**54 そして、この朽ちるべきものが朽ちないものを着て、この死ぬべきものが死なないものを着るとき、このように記されたみことばが実現します。「死は勝利に呑み込まれた。」**

イエスは死を打ち破り、死に勝利するために、よみがえる必要があったのです。

このために、今日行う聖餐式でイエス・キリストの復活を祝うことがものすごく重要なのです。

### 55 「死よ、おまえの勝利はどこにあるのか。死よ、おまえのとげはどこにあるのか。」

私が大好きな御言葉です。

「もはや、死には棘がないので、クリスチャンが突き刺されて敗北することはない。

だから、クリスチャンは決して死を恐れず、歓迎すべきだ。」

## ヘブル書 2:14-15

14 そういうわけで、子たちがみな血と肉を持っているので、イエスもまた同じように、それらのものをお持ちになりました。それは、死の力を持つ者、すなわち、悪魔をご自分の死によって滅ぼし、

15 死の恐怖によって一生涯奴隷としてつながれていた人々を解放するためでした。

死の恐怖。

D.L.Moody は、「死は恐怖の王かもしれない。でもイエスは王の王である。」

最高の言い方です。

言い方を変えると、私たちがイエスのために生きると、イエスのおかげで、死が恐怖ではなくなるのです。

イエスが十字架で成し遂げたみわざによって、死は勝利の中に呑み込まれました。

もはや、死は私たちが恐れさせるものではなく、突き刺すものでもありません。

しかし、パウロのように言うには、また人生に於いてそれを真実にするためには、人生をイエス・キリストに献げるのが前提です。

そして、イエス・キリストのために、この世で生を生きている事が前提なのです。

牧師の私が最も辛いことの一つは、主を自分の救い主として知っていたのか分からない方々の葬儀をする時です。

C.T.Studd の有名な名言。

「人生は一度きり。あつという間に終わってしまい、キリストのためにしたことだけが残る。」

正直に言えば、これは髪の毛が逆立つような言葉ですよ。わずかしが残っていませんがね。

よく考えてみて下さい。

これは、大変身の引き締まる真実です。

I コリント 3 章で、パウロが再度コリント教会に言っているのは基本的にこういうことです。

二つの火があって、一つは肉がすることを表す、木、草、藁を焼く火。

それらに価値は全くなく、完全に燃やし尽くされます。

私たちには一人ひとり全員、それらを積み上げた山があって、幾人かの山は、他の人のより大きい。

私の山は巨大ですよ。私を見ないで下さい。言っておきますが、あなたのも大きくなりますよ！

その全てが燃やし尽くされます。

でも、別の山もあります。

それは、金、銀、宝石から作られるもので、火はそれらを燃やし尽くす代わりに、全く清めて価値あるものにするのです。

私の山も、こちらの方がもっと大きくて価値があり、永遠に残ることを望みます。

「先生、何のことですか？」

つまり、パウロが今朝ここで言っていること。

最後の裁きの時、私たちは主の前に立ち、全ての言動について弁明しなければなりません。

そして、全ての行いに応じて報酬を受けますが、イエス・キリストのためにしたことだけが、価値あるものとして永遠に残るのです。

それを視野に入れて見て下さい。

そうするなら、この仮の地上、霧のように消えていくこの世での生き方の優先順位が変わりませんか。

2 - 3 週間前、娘とデポーションしていた時に、永遠というものが私の心を打ちました。

それはまるで主が…皆さんも主が何かを語られて、こんな風になる瞬間があると思いますが、「うわ～うわ～うわ～！主よ～！うわ～うわ～うわ～うわ～！」という感じで。

主が語られたのは、「永遠は永遠である。決して、決して終わらない永遠である。」

もはや死などなく、決して死ぬことはない。決して死なない。

皆さんが理解しやすいようにしているつもりです。

パウロは、「私たちが待ち受けるものの素晴らしさは理解できない」と保証しています。

ちょっと先走って言うってしまうなら、「この人生がどんなに苦しくても、待ち受ける栄光と比べるなら取るに足らないのだ」と。

では、22-26節を見ましょう。“未来への恐れ”に関してです。

**22 しかし、肉体において生きることが続くなら、私の働きが実を結ぶことになるので、どちらを選んだらよいか、私には分かりません。**

これには驚きました。

パウロは、自分の命が続くなら、将来もまだ実を結ぶのだということを知っていたようです。

本当に、ピリピ教会へのパウロの心中を垣間見ます。

彼は本当にこの教会を愛している。

その時私が気づいたのは、彼は「むしろ、私は世を去って、キリストと共にいたい。」と言っていること。

「でも、あなた方には、まさに私が必要であることも分かっている。私がここに留まるのが、あなた方のために実を結び、助けになるから。」

パウロは私たち全員が知っているべきこと、すなわち、「神は私たちを見放したのではない。神にはまだ、私たちへの計画があるのだ。」ということを知っていたようです。

私の母語のアラブ語に、ある諺があります。祈りのようでもあるのですが。

「主よ、私のために彼らを生かし、彼らのために私を生かして下さい。」

私は家族のために、よくそのように祈ります。

具体的に、「妻と子供たちを私のためにお守りください。そして、彼らのために私をお守り下さい。」と。

彼らには私が必要で、私にも彼らが必要なのです。

ところで、これが、皆さんがまだここにいる理由なのですよ。

あなたがこの世で最後の息を吐き、天で最初に呼吸をするのは、お役目完了の最終日から一日も、一時間も、一秒たりとも前には起こりません。

あなたがレースを終える時。神があなたへの計画を完了される時。

それより早くなることはありません。

まさにこれこそが、クリスチャンにとって、パウロにとっては絶対に、未来に起こる事を恐れない理由なのです。

彼は、誰が未来を握っているのかを、つまり、神が自分に計画を持っておられる事を知っていたのです。

その計画とは、**エレミヤ書 29:11**、多くの人にとって、人生の聖句です。

**わたし自身、あなたがたのために立てている計画をよく知っている—主のことば—。**

**それはわざわざではなく平安を与える計画であり、あなたがたに将来と希望を与えるためのものだ。**

「それが、あなた方へのわたしの計画だ。それが計画なんだよ。」

皆さんが多分、今まで考えなかったようなことを示しましょう。

あなたのいのちは、救われた日に始まったと知っていましたか？

というのは、その時以来、ずっと永遠に、全てが栄光だからです。

あなたは救われたのですから。

だから、天国があなたを待ち受けているのです。それがあなたの未来。

今の時期（11月）は一年の終わりに差しかかっています。

いつも年の終わりになると過ぎ去る年を振り返り、それを持って新しい年を迎えます。

新年に対する予想や何やらには事欠きません。

一年を振り返り、来る年に思いを巡らして、それからすぐに新年の抱負を語ります。

私の場合は、それは1月3日くらいまでしか続きませんが。だから私はもうしません。

新年にあなたを待ち受けているものが何か、知っていますか。

私は神の御言葉の権威で予測し、2019年にあなたを待ち受けている事を断言することができます。

もしまだ主が来られないなら、あなたの命の全ての日に主からの善と憐みが与えられます。

ここでの最後の息を吐くまで善です。悪ではない。

もちろん、悪いこともありますよ。

でも、**すべてのことがともに働いて益となる（ローマ 8:28）**

神は、結果としてご自分の栄光とあなたの益にならないのなら、悪が起こるのを決して許しません。

神は決してそれを許さない。それは神にはできない。神はそういうお方です。

それは、愛なる神の本性に反することだから。

神はあなたが考える以上に、あなたを愛しておられる。

神がどれほど、どんなに大きな愛であなたを愛しているか、決して分からないでしょう。

あなたは愛されている。

先週カリフォルニアにいた時、あちらの大学にいる息子をどんなに愛しているかと思いました。

彼を迎えに行き行って大きく抱きしめ、それから撮影のためにロスへ連れて行くのに、彼は助手席に座っていたのですが、それだけで本当にワクワクしました。

彼がいなくてとても寂しかったのです。

主は「あなたは、息子をどれほど愛しているか知っているか。」

「主よ、私は彼をとっても愛しています。」

「それさえ比べものにならないくらい、わたしはあなたを愛しているんだよ。」

「おお～！ 主が私を愛している！」「神は私を好きでいて下さる！」

残念ながら、この世は“愛”という言葉が乱用されすぎたあまり、“好き”の方がもっと効果的なのです。

正直に認めましょうよ。

「神はあなたを愛しています。」と聞くと、「ああ、そうだね、そうだ、そうだ。」

でも、「見てみなよ！ 神様はあなたのことが大好きだよ！」と言ったら、「神が!? 大好きだって!?!」

「そう！ 神はあなたが好きなんだよ！」

全体の状況が変わりますよね。

神はキミの近くにいたいんだ！ 神はあなたと一緒にいたいんだ！

イザヤが書いているように、神の私たちに対する気持ちは測り知れないのです。

考えてみて下さい。

海辺の砂も、空の星も数えることができないように、それ以上に、神がどんなにあなたを思っているか、あなたには測り知ることができない。

神は私をそれほどまでに愛しているから、私にとって最高のことを望み、祝福したい、私を成長させたいと願っておられる。いつだってそうです。

親である方は、自分の子供を祝福したいでしょう。

子供たちが祝福され、幸せでいてほしいでしょう。

“子供の苦しみは親の苦しみ”と言われますが、それは真実です。

子供がいる人は誰も、我が子が苦しんでいるのを見たくはありません。

それは、あなたの心に大変な苦痛をもたらします。

またしても先走ってしまいましたが、時間の都合で、マタイ 6 章に軽く触れておきます。

私は多くの御言葉で同じことを言っていますが、ここは、御言葉全ての中でも、本当に好きな箇所です。

神は長年にわたって、この箇所を私の中でパワフルに用いられました。

大脳辺縁系システムの一部かどうか私には分かりませんが、私たちの幾人かは、他の人よりも恐れを抱きやすい傾向にあります。

マタイ書には山上の垂訓が記されていて、イエスは思い悩んだり、恐れたりしないように教えただけでなく、そ

の理由も語っています。(マタイ 6:25-34)

その理由とは、私たちは神にとって大変価値があり、神にとっても愛されているということ。

神が、大して価値のない、今日があっても明日にはもうないような野の花の世話をされるのなら、あなたのことをどれほど大事に養って下さるか。

あなたは神のかたちに創造され、無限の価値があるのです。

花は神のかたちに作られていません。

**栄華を極めたソロモンでさえ、この花の一つほどにも装っていませんでした。(マタイ 6:29)**

皆さん、想像してみてください。

私たちはイスラエルに、祝福の山と言われるところに行くのですよ。(11月のイスラエルツアー)

山腹には花が咲き乱れ、空では鳥が戯れています。

私は救世主が花々だけではなく、鳥についても指摘したことを思います。

「空の鳥を見なさい。彼らが恐れているように見えますか。」

鳥たちが心配している様子は想像できません。「来月の家賃を払うだけの虫を持ってない。」とか。

馬鹿げているでしょうが、ポイントは分かったでしょう。

天の父が鳥たちを養っている。天の父が、彼らに必要なものを全て与えているのです。

そして、要はこれです。

**あなた方はその鳥よりも、ずっと価値があるではありませんか。(マタイ 6:26)**

私はそう思いたいですよ。

鳥は神のかたちに創造されましたか。「いいえ。」

私は神のかたちに創造されましたか。「はい。」

それなら、主は私に、どれほど多くのものを与えて下さるでしょう。

私の神はこんなに偉大だというのに、私の信仰はなぜそんなに薄いのでしょうか。

思い悩まない。恐れない。

ピリピ書 4章 6節 - 8節。

ギリシャ語では基本的にこう読まれます。「何も思い煩わないで」(ピリピ 4:6)

本当にその通りだと思います。

私たちが思い煩う傾向にあって、すごく恐れたり、悩んだり、心配したりする原因の一つは、私たちが天の父にどれほど愛されていて、どれほど価値があるのかを本当に信じていないことです。

これは悲劇です。

最後に 27節-30節を見ましょう。

残りの時間、ちょっと時間を費やしたい大事な箇所です。

困難、辛苦、痛み、そして苦痛への恐れ。

27節を注意して見て下さい。「**ただキリストの福音にふさわしく生活しなさい。**」

パウロは「何が起こっても、何があっても、**ただキリストの福音にふさわしく生活しなさい。**」と言っています。

何が起こっても、何が起ころうとも。つまり、起ころのです。でも、「何が起ころうとも」です。

28節では、「**どんなことがあっても、反対者たちに脅かされることはない。**」

なぜそう言っているのでしょうか。もう、脅かされていたのでしょうか。

そうです。彼らは反対者、迫害、困難、辛苦、痛み、苦痛を恐れていました。

29節 - 30節、これが大事です。

**29 あなたがたがキリストのために受けた恵みは、キリストを信じるだけでなく、キリストのために苦しむことでもあるのです。**

これは、牧師のメッセージとして、人気のあるトピックではありません。そうでしょう。

私はキリストへの信仰について話したいのであって、キリストのための苦しみについては話したくない。使徒の働きにいくつかあるのは、「私たちは苦難の中を通して天の御国に入るのだ。」「イエス・キリストと歩む者は迫害に苦しむ。」

ヨブ記。

「ああ、願わくば神よ。」ヨブが主に語っているのが好きです。

**「見よ。神が私を殺しても、私は神を待ち望み、なおも私の道を神の御前に主張しよう。」(ヨブ記 13:15)**

「何があろうと、この先何に直面しよう問題ではありません。

困難や痛み、苦痛、悲しみ、悲痛があろうと問題ではないのです。何があろうと、たとえあなたが私を殺しても、私はあなたを望み、信頼します。」

エステル記。

エステルがどんなに怯えていたかを思います。

招かれないで王に近づくなら、もし王が金の笏を差し伸ばさなければそれまで。確実に死ぬ。

彼女はそれを知っていました。モルデガイも知っていました。

それでも彼女は言ったのです。

**「私は、死ななければならないのでしたら死にます。」(エステル記 4:16)**

それで神は聖霊によって、私たちのためにこのことを聖書に記録されました。

これらの人々に会うのが待ちきれません。間もなく会って、永遠に一緒に過ごしますよ。

パウロは、もし死ななければならないのなら、それは益だと言っています。

私はどちらにしても勝利している！

神が私を殺しても、私は神を賛美する。人生に何があろうと問題ない。

死ぬか、或いは携挙されるか、どちらでも先に起こる方、私は携挙を祈りますが、それまでの間、何があろうと、神はあなたに十分な恵みを下さいます。

だから私は耐えることができるのです。

神がご自身の栄光と私の益のために許さない限り、試練も誘惑も何も起こらないから。

もう一つよく聞いてください。

**30 かつて私について見て、今また私について聞いているのと同じ苦闘を、あなたがたは経験しているのです。**

since you are going through the same struggle you saw I had, and now hear that I still have. (NIV)

“Struggle” (奮闘する) という言葉は色んな翻訳がされています。

原語のギリシャ語では “αγώνας” (アゴナス)

英語では “Agony” (苦悩)

パウロが言っていることが分かりますね。「私には、何であろうと多くの痛み、苦痛があるんだ。」

あなたには多くの苦悩 (Agony) があります。

しかし神は (But God) 言われます。

「あなたには恐れる理由はない。恐れに満たされる必要もない。その代わりに、喜びに満ち溢れることができるのだ。」

パウロは言いました。

「何があろうとも、恐れなくていい。私が苦しむ価値があると神が見なされた時には、その痛みは無駄にならないのだから。」

「何ですって!?!」 「神は、そんな苦しみに価値があると思っているのか?」

娘ノエルが亡くなった時、私は主に泣き叫びました。「なぜ!?! どうして!?!」

「なぜ？」と聞くのは間違ったことではありません。

時に神は、そういう「なぜ」に答えて下さらず、私たちが神との栄光に入るまで、決して分からないこともあります。

でも、神が教えて下さったことは、「あなたにはその価値があると思っている。そういう痛みや苦しみを受けるに値するのだ。」

そして、そのことが本当に、物事の視点全体をダイナミックに変えました。

それから神が私に語ったことは、肉声として聞こえませんが私の心にですが、質問形式でした。

「わたしがあなたと妻に、『女の子を産むこと、そしてその子が死んで、わたしのところに来るまでの短い期間、その子にしっかり寄り添い、愛して欲しい』と頼んだなら、あなたは受け入れてくれるか。」

主が私に、モルデガイがエステルに言ったのと同じフレーズを言われるとは想像できませんでした。

「もし嫌なら、わたしは誰か別の者を見つける。別の所から、助けと救いが起こるだろう。

わたしはあなたがそういう苦い杯を受けるに値すると思っているのだ。

あなたはこれを受けてくれるか。それとも別の者を見つけるべきか。」

「分かりました、主よ。」

あれほどの短期間でしたが、私に与えられたあの娘がいなかった人生など想像できません。

感情的になってすみません。

F.B.Meyer の言葉をもって締めくくります。

彼はこのように雄弁に語っています。

「全員が苦しみに耐えられるわけではない。全員が燃え盛る恐ろしい試練に立ってられるわけではない。人は軽率に不満を口にする。だから神は、注意深く精査して選ぶのだ。ナイフに耐えることのできる枝を。顔を上げて、ズキズキする痛みの一つ一つを、それぞれの苦悩の時を神からのものとして受け入れなさい。敢えて、感謝しなさい。

荒々しく包まれている、苦しみの中に秘められたメッセージを開封したら、その中に宝物があるのです。」

預言者がアサ王の所に来て言いました。

**「主はその御目をもって全地を隅々まで見渡し、その心がご自分と全く一つになっている人々に御力を現してくださるのです。」(Ⅱ歴代誌 16:9)**

問題は、主の目が全地を見渡す時、私を見つけて下さるか。

神は私を、大変な恐怖や恐れ、狼狽させる世の出来事を受け止める価値のある者だと思って下さるだろうか。ということです。

祈りましょう。

愛する天のお父様、聖霊に導かれたパウロがピリピ教会に書いているこの御言葉に、私たちは感謝しきれません。このあなたの教会で、あなたが私たちに御言葉を適切に語られたことが分かりました。

主よ、ありがとうございます。

イエスの御名によって。アーメン。

~~~~~  
**「きょう、もし御声を聞けば、あなたがたの心をかたくなにはならない。」ヘブル 4:7**

メッセージ by JD Farag 牧師

カルバリーチャペルカネオヘへ <http://www.calvarychapelkaneohe.com/>

Calvary Chapel Kaneohe 47-525 Kamehameha Hwy. Kaneohe, Hawaii